

令和8年3月14日
高等学校課

1 調査の目的

生徒・教職員の高校教育に対する意識等について把握し、これまでの取組を検証するとともに今後の施策に活かす。

2 調査方法 Google フォームにより回答

3 実施時期 令和7年11月上旬～令和7年12月中旬

4 調査対象

- (1) 県立高等学校全日制・定時制課程第2学年（2年次）生徒全員
 - (2) 県立高等学校教職員全員（主幹教諭、指導教諭、教諭、講師、実習教諭、実習助手）
 - (3) 県立高等学校全日制・定時制課程第2学年（2年次）生徒の保護者全員
- ※保護者を対象とした調査は令和5年度から実施

5 調査回答者数

調査対象	回答者数	調査対象者数
県立高等学校生徒	2,678名	3,201名
県立高等学校保護者	1,494名	3,201名
県立高等学校教職員	883名	1,031名

※調査対象者数は、参考値として令和7年5月1日現在の人数を記載

6 「教育に関する大綱」の指標とアンケートでの肯定的回答の割合および分析

地域の行事に参加している	指標：50%	R6：48.5%	R7：47.1%	増減：-1.4
肯定的な回答の割合は、コロナ禍が終息し始めた令和4年度から5年度の時期に増加したが、その後は、ほぼ増加は見られない。一方、各高校では、地域課題を題材とした探究活動や生徒発案のプロジェクト等が実施されており、地域と関わる機会が創出されている。これらの機会を活かし、地域の動きに興味や関心を持つ生徒の育成を推進していく必要がある。				
将来の夢や目標を持っている	指標：80%	R6：76.0%	R7：74.9%	増減：-1.1
進路希望を実現するため、目標に向かって努力している	指標：79%	R6：78.5%	R7：78.2%	増減：-0.3
両質問項目とも、肯定的な回答の割合は、この3年、大きな変化はなく、約75～80%を推移している。また、質問項目「将来、人の役に立つ人間になりたい」の肯定的な回答の割合（93～94%）と比較して割合が低い。将来について考えようとしているが、具体的な目標を見出せない生徒が一定数存在すると考えられる。今後新たに進める教育改革において、産業界や高等教育機関と連携した取組を拡充していくなかで、将来求められる人物像を鮮明にイメージし、前線で活躍されるロールモデルに触れることをとおし、自らの将来をデザインする機会を創出するとともに進路指導等の充実に結び付けていく必要がある。				
将来は、今住んでいる地域や鳥取県で働きたいと思っている	指標：60%	R6：53.0%	R7：55.3%	増減：+2.3
肯定的な回答の割合は、この3年、大きな変化はなく、50%台前半を推移している。また、専門学科においては、肯定的な回答の割合が普通学科や総合学科よりも高い傾向にあり、インターンシップや企業との連携による実習など、県内企業との関わりが多いことが影響していると考えられる。普通学科や総合学科においても、地域の社会人、卒業生、NPO団体等との協力・協働を進めるなど、ふるさとキャリア教育をさらに充実させ、ふるさと鳥取県に誇りと愛着をもつ生徒の育成を推進する必要がある。				

学校の授業は、分かりやすく、充実したものが多く	指標：78%	R 6：78.8%	R 7：81.3%	増減：+2.5
肯定的な回答の割合は、本年度は80%を超え、平成28年度以降の10年で最高値となっている。協働的な学びや、主体的・対話的で深い学びの広がりによる効果が表れていると考えられるが、今後進める教育改革のなかで、最先端の設備等の充実を図るとともに、実社会につながる生きた授業を実践し、また、学校の枠を超えて多様な協働を創出するなど、より充実した授業の実践をめざす。				
読書が好きである	指標：70%	R 6：60.9%	R 7：58.7%	増減：-2.2
平成28年度以降の10年、肯定的な回答の割合は、大きな変化はなく、約60～65%を推移しており、この2年は連続的に減少となっている。朝読書の活用や、図書館を魅力的で使いやすいものにする事例の共有、ビブリオバトル等の企画を発展させるなどし、読書を始めるきっかけとなるような取組を推進する必要がある。				
家で、自分で計画を立てて勉強している	指標：52%	R 6：50.7%	R 7：48.0%	増減：-2.7
この3年、肯定的な回答の割合はほとんど変化がなく、本年度は減少した。また、平日における1日平均の家庭学習時間についての質問でも、「2時間以上」と回答した生徒の割合は、この2年減少している。前述のとおり、自らの将来をデザインする機会を創出し、長期目標を設定するとともに、スモールステップの構築やICT機器を有効に活用した個別最適な学び等の充実など、家庭での学習につながるような工夫や、学校でのはたらきかけを促進する必要がある。				

7 その他の項目に関するアンケートでの肯定的な回答の割合と分析

高校や高校生活に関する意識				
この高校に入学して満足している		R 6：80.9%	R 7：83.4%	増減：+2.5
学校行事や部活動などが盛んで、学校に活気がある		R 6：82.2%	R 7：83.9%	増減：+1.7
自分の進路希望を実現する上で、学校での学習は役に立っている		R 6：82.0%	R 7：83.8%	増減：+1.8
高校生活をとおして、自分が人間的に成長している		R 6：85.1%	R 7：86.3%	増減：+1.2
すべての質問項目について、肯定的な回答の割合は、この2年、続けて増加し、令和6年度以降は80%を超えている。県立高校全体として、高校生活を前向きに捉えている生徒が増加していると考えられる。				
総合的な探究の時間（課題研究等）では、自分で課題を立てて、情報を集めて整理し、調べたことを発表している		R 6：82.2%	R 7：81.9%	増減：-0.3
肯定的な回答の割合は、この3年継続して80%を超えているが、専門学科は、普通学科や総合学科と比較して、約20～30ポイント低い。特に専門学科においては、課題設定、情報整理などが、生徒にとって主体的な活動となるような工夫を行うとともに、今後新たに進める教育改革のなかで、学科、学校を超えた協同研究や成果発表等の機会を創出し、生徒の新たな興味を引き出すための発展的な交流も進めていく必要がある。				
＜教職員用アンケート＞生徒一人一人に配備されたPC・タブレットなどのICT機器をどの程度使用させているか。 ※「週1回以上」の回答割合				
生徒が自分で調べる場面		R 6：59.8%	R 7：57.6%	増減：-2.2
生徒が自分の考えをまとめ、発表・表現する場面		R 6：39.5%	R 7：39.8%	増減：+0.3
生徒同士がやりとりする場面		R 6：44.7%	R 7：39.5%	増減：-5.2
生徒が自分の特性や理解度・進度に合わせて課題に取り組む場面		R 6：48.9%	R 7：49.3%	増減：+0.4
すべての質問項目について、「週1回以上」という回答の割合が、1人1台端末の配備が完了した令和6年度と比較してほとんど増加していない、または、減少している。また、「生徒が自分で調べる場面」と比較して、他の場面では、約8～18ポイント低い。「個別最適な学び」と「協働的な学び」の一体的な充実を図るための有効なツールとして、ICT機器の有効な活用法を研究するとともに、優れた活用事例を共有するなど、より一層の活用を推進する必要がある。				